

スマートシニア・ビジネスレビュー

November 6, 2001 / Vol.2

「二十一世紀手習塾（てならいじゅく）」の提案

- 人生経験豊かなシニアが子供の自学自習を支援する -

ソフィアバンク ディレクター 村田 裕之

要 旨

1. 小・中学生、高校生の学習意欲が低くなっていると言われている。しかし、最近のいくつかの調査によると、子供たちの学習意欲が低いのは「教科書中心の学習」や「受験のための学習」であり、「学校外のいろいろな場所に行きつてする授業や調査」などの「体験学習」や「学びとは何か、何のために学ぶのか」などの「学びの学習」についてはむしろ高い関心を持っている。
2. 一方、このような「体験学習」や「学びの学習」の支援者として有望なのはシニアである。なぜならば、シニアは実社会での豊富な人生経験を通じて「体験の智恵」を身体化しており、学校の教科書型授業では教えられない「学ぶことの意味」や「生きることの意味」を自分自身の体験で語るができるからである。
3. これらより、豊富な人生経験を持つシニアと子供とを結び付けることで、子供が求めている「体験学習」「学びの学習」の機会を提供することができる。このようなコンセプトを江戸時代に子供の学習の場として普及していた「手習塾（寺子屋）」にならい「二十一世紀手習塾」と呼ぶ。米国では「エクスペリエンス・コース」などで、似たような仕組みが既に全米の都市で実施されている。
4. この「二十一世紀手習塾」を、2002年4月より全ての小・中学校、高校で導入される「総合的な学習の時間」に中核プログラムとして取り入れることを提案したい。その理由は、「体験学習」や「学びの学習」の支援者としてのシニアの適性は高く、その能力を発揮しやすい、定年退職後も能力があり、意欲のあるシニアが増えており、シニア人材の有効活用となるからである。なお「総合的な学習の時間」とは、文部科学省の新学習指導要領に従い、従来の教科書型学習にとらわれない自由な教課時間のことである。
5. 実際の運営では「総合的な学習」の内容を決定する学校側の意向をくみ、カリキュラムを企画するプロデューサー機能と、多くのシニア人材から適切なプロフェッショナルを探索し、学校側と調整できるコーディネーター機能が重要となる。

目 次

1. 子供たちの学習意欲は本当に低下しているのか？
2. 米国で広まるシニアによる子供の学習支援「エクスペリエンス・コース」
3. シニアの体験を聴きたがる子供たちが増えている
4. シニアによる子供の自学自習支援「二十一世紀手習塾」の提案

1. 子供たちの学習意欲は本当に低下しているのか？

小・中学生、高校生の学習意欲が低くなっていると言われていた。しかし、最近のベネッセコーポレーションの調査（図表1）などによると、子供たちの学習意欲が低いのは「教科書中心の学習」や「受験のための学習」であり、「学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査」などの「体験学習」や「学びとは何か、何のために学ぶのか」などの「学びの学習」についてはむしろ高い関心を持っている。

一方、このような「体験学習」や「学びの学習」の支援者として有望なのはシニアである。なぜならば、シニアは実社会での豊富な人生経験を通じて「体験の知恵」を身体化しており、学校の教科書型授業では教えられない「学ぶことの意味」や「生きることの意味」を自分自身の体験で語るることができるからである。

すでに、このようなシニアの能力を子供の学習へ活用する動きが国内外に見られる。

2. 米国で広まるシニアによる子供の学習支援「エクスペリエンス・コース」

(1) “シニア体験団”が子供の学習を手助け

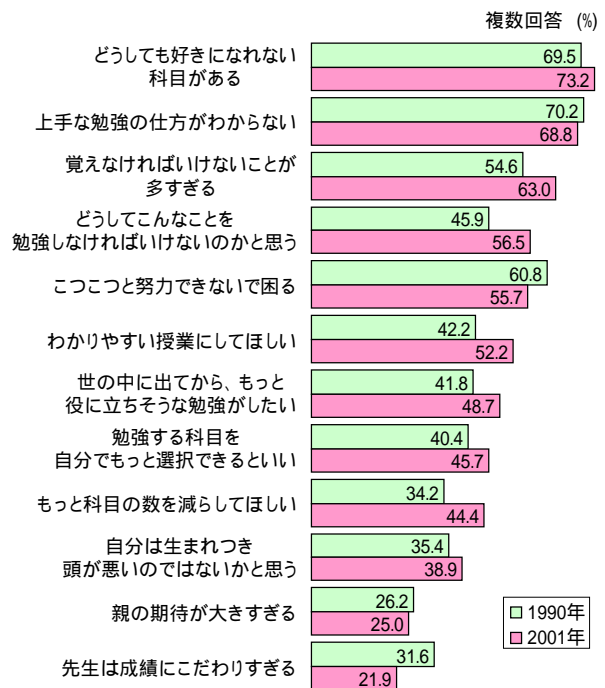
米国サンフランシスコに拠点を置くNPOのシビック・ベンチャーは、シニアが地域のコミュニティセンター等で子供たちに読み書きを教えたり、本を読み聞かせるプログラム「エクスペリエンス・コース」を運営しており、新たな試みとして注目されている。エクスペリエンス・コース（Experience Corps）とは、直訳すれば「体験団」であり、シニアの人生体験を子供の学習に役立てる“団体”というコンセプトである。

エクスペリエンス・コースは1995年、若い世代の学力・能力開発にシニアの知恵を役立てる、

学校やYMCAなどの地域コミュニティ施設で世代間交流を行う、学校と地域間の結びつきを強くする、シニアボランティアを増やすことを目的に開始された。

エクスペリエンス・コースのメンバーの仕事は、

図表1. あなたは勉強について、次のように思うことがありますか？（中学生）



（出所）ベネッセ教育研究所「第3回学習基本調査」2001年

学校や地域のコミュニティセンターなどで、直接子供たちと会い、子供たちの学習を支援することである。ABCの読み書きを教えたり、一緒にゲームを行ったり、本の読み聞かせなどを行う。さらに、親参加の会合や図書館活動を推進するために、教師、教育関係者と一緒にボランティア活動を行うこともある。

メンバーの多くは、セミリタイアしたあるいはパートタイムで仕事を持つ55歳以上のシニアで、面接を受け、意欲が認められた人だけが選ばれる。エクスペリエンス・コースに参加するための特別な経験は必要ないが、これまでの人生経験が重要となる。実際に仕事に従事する前にはトレーニングの機会が設けられているほか、会合、講義、研修旅行など指導力向上のための勉強機会が数多くある。

メンバーには、フルタイム、パートタイム、エピソードの四種類がある。フルタイム・メンバーは、米国のボランティア団体「アメリカープ」のメンバーである場合が多く、その地域のコーディネーターを務める。パートタイム・メンバーは、週15時間以上参加し、必要経

費が支払われる。パートタイム・メンバーは、週2～14時間活動に参加する。そして、エピソード・メンバーは、学校の行事などを時々手伝う。

エクスペリエンス・コースは、現在全米15の都市で展開されているが、各地域の運営は大学やコミュニティ組織から成る地域コーディネーターが行う。シビック・ベンチャーはエクスペリエンス・コースの本部組織として各地域の立ち上げや技術面での支援を行う。運営費はアメリカープのほか、各種基金、地方自治体や企業、個人からの寄付により成り立っている。

(2) 日本では少ないシニアによる学習支援

日本においても文部科学省が中心となって、シニアと子供の交流活動の場として、児童生徒数の減少等により使われなくなった小・中学校の「余剰教室」を活用する動きが見られる。しかし、その活用の仕方は、デイサービスセンターなどの社会福祉施設への転用が多く、子供の学習支援の場としての活用はまだ少ない。また、シニアが郷土芸能や昔の遊びを伝える授業を実施する例もあるが、このような授業を実施できる人は学校の比較的近くに在住する必要がある、実施できる地域が限られている。

3. シニアの体験を聴きたがる子供たちが増えている

(1) ネット・コミュニティで伝わるシニアの体験の智慧

全米200ヶ所以上でシニア向けのパソコン・インターネット教室を展開するシニアネットは、3万人以上のシニアが集まるオンライン・コミュニティも手がけている。このコミュニティは、シニア同士で旅行や健康などの話題をやりとりするだけでなく、他の世代へメッセージを伝えるコミュニティとしても注目されている。

例えば、このコミュニティには第二次世界大戦の実体験を若い世代に伝達するコーナーがある(図表2)。このコーナーのきっかけは、ある中学校の先生から「授業で歴史の教育をやりたいたいけれども、話をしてくれる年長者はいませんか」と

図表2. 「シニアネット『第二次世界大戦の記憶』」のページ



(出所) <http://www.seniornet.org/ww2/>

シニアネットに問い合わせがあり、シニアネットの会員に呼びかけたところ「ぜひ、話したい」という人が大勢集まってきたことによる。それならばということで、サイト上に体験を語る場を設けたところ、これが人気コーナーになった。

ここで重要なことは、このコミュニティに来て、そのような体験を持つ人と話をしたがる若い世代の人が結構多いという点である。核家族制が進む米国では世代間の交流が乏しいため、祖父母の世代の体験を聴く機会も限られているのである。

もう一つ重要なことは、このような自分の体験を話したがるシニアも大勢いるということだ。実際、オンライン・コミュニティでは、戦場で後方支援をやっていた人の話や日本軍と戦ったという話などが多く語られた。

(2) 日本の子供達にも求められているシニアの体験の智慧

実は同じようなことは日本でも起きている。ただし、これはネット上の話ではない。アサヒビールの元副社長、中条高德氏が『おじいちゃん、戦争のことを教えて』という本を出しているが、これが15万部のロングセラーになっている。

なぜ、こんなに売れているのかというと、先ほどの話と似たような経緯がある。自分の孫娘がアメリカに留学して、歴史の先生から戦争の話聞いてレポートをまとめるように言われた。そこで、その孫娘は「自分にはおじいちゃんがいるので聞

いて書こう」と手紙で中条氏に多くの質問をしたのである。当初は適当に相手をすればよいと考えていた中条氏だが、質問がかなり鋭くかつ真剣なため、これはいい加減には答えられないと考え直し、真面目に返事を書くようになった。この積み重ねが結構な量のレポートになり、それはもったいないから本にしたらどうかという話が持ち上り、その結果15万部売れたのである。

面白いのは、本の出版後、読者から著者に2千通を超える手紙が来たが、その大半が若い世代からのものだったことだ。これは、日本の若い世代の多くが、学校では教えてくれない「体験の智慧」を求めているということではないだろうか。

4. シニアによる子供の自学自習支援「二十一世紀手習塾」の提案

(1) 「二十一世紀手習塾」とは何か？

以上の国内外の動きを踏まえると、豊富な人生経験を持つシニアと子供とを結び付けることで、学校では教えないが社会的価値が大きく、子供が求めている「体験学習」「学びの学習」の機会を提供することができる。このようなコンセプトを江戸時代に子供の学習の場として普及していた「手習塾（寺子屋）」にならい「二十一世紀手習塾」と呼ぶ。

手習塾は、明治以降の近代学校教育と異なり、徹底した自学自習を原則としていた。手習塾の師匠の役割は、子供一人ひとりに適切な手本を書いたり、選択して与えたり、子供達の誤りを指摘し、矯正することに徹していた。つまり、規範に合致する「わざ」を知らしめることが主な役割であった。積極的に「教え込む」のではなく、子供自らの学習を尊重するという意味で「教えない」教育といえる。決められた教科書を「教え込む」現代の教育とは対極的なスタイルである。しかし、現在の子供達は、むしろこのような「手習塾」的なスタイルを求めていることから「二十一世紀手習塾」と呼ぶことにした。

(2) 「二十一世紀手習塾」を「総合的な学習」で活用すべき

この「二十一世紀手習塾」を、2002年4月より全ての小・中学校、高校で導入される「総合的な学習の時間」に中核プログラムとして取り入れることを提案したい。その理由は、体験学習や学びの学習の支援者としてのシニアの適性は高く、その能力を發揮しやすい、定年退職後も能力があり、意欲のあるシニアが増えており、シニア人材の有効活用の中核となるからである。なお「総合的な学習の時間」とは、文部科学省の新学習指導要領に従い、従来の教科書型学習にとられない自由な教課時間のことである。

(3) 「二十一世紀手習塾」実行のポイント

「二十一世紀手習塾」の実際の運営においては、次の三点が特に重要となる。

「総合的な学習」の内容を決定する学校側の意向をくみ、独自のカリキュラムを企画するプロデューサー機能を持つこと。

多くのシニア人材から適切なプロフェッショナルを探索し、学校側と調整できるコーディネーター機能を持つこと。

学習の場として、学校だけでなく、地域の図書館や文化施設を活用すること。なぜならばこれからのブロードバンド時代には、AV機材の整った施設は、教える側、学ぶ側双方に有効な体験学習の場となりうるからである。

については、「総合的な学習」の内容を決定する権利を持つのは学校であることから、学校側の意向をくみつつ、子供達の声を反映した独自のカリキュラムを企画するプロデューサー機能が重要である。

NHK テレビに「課外授業 ようこそ先輩」という番組がある。小学校の卒業生のタレントや漫才師、アーティストなどが課外授業を受け持つというスタイルの番組だが、非常に人気がある。この人気の秘密は、まず教科書では教えないことをテーマにしていることである。また、必ず子供に体験させることも重要である。ある時は雅楽師出身の演奏家が生徒と雅楽器の演奏会を開催し、ある時は漫才師が生徒それぞれにスピーチコンテ

ストをやらせたりする。

このように毎回必ず異なるテーマを選び、それに相応しく、かつ子供を相手にわかりやすく話ができる“先輩”を登場させるための企画・プロデュース力がこの番組の要になっている。このことから、「総合的な学習の時間」においても、このような企画・プロデュース力が求められることは間違い無い。

については、また、シニアのプロフェッショナルを探索し、各地域のプロフェッショナルと学校とを結び付けるコーディネーター機能が重要である。「体験学習」や「学びの学習」の支援者として、例えば地域の産業や文化など専門分野を持っているプロフェッショナルを探索することだ。

しかし、単に専門知識を持っているだけでは十分ではない。子供は自らの体験からにじみ出る言葉の重みや語るスタイルに無言の迫力を感じるのである。したがって、それなりの品格、見識を持っている人材の選定が極めて大切だ。

さらに、年齢差の大きい子供たちにわかりやすく説明できるスキルも重要である。前述のエクスペリエンス・コースでは、子供への指導に従事するシニアに対して、指導方法を教える研修や、反省点を意見交換するための定期的な勉強会も開催されている。

については、これからのブロードバンド時代においては、学校以外の体験学習の場として地域の公共機関が考えられる。というのは各地域の文化施設や図書館、児童センターには過去のマルチメディア・ブーム、インターネット・ブームに伴い、各種AV機器が豊富に整備されている場合が多いからである。これらを活用し、大画面で講義のVTRを放送したり、ライブによるQ&Aのやりとりを行うことで、教科書的な講義ではない体験的な学習が可能となる。

また、ブロードバンドの普及によって、従来のような文字を主体としたコンテンツだけではなく、動画、音声による五感に訴える表現が可能となるが、これは教える側のシニア、学ぶ側の子供双方にとって有効である。

さらに、各地域におけるシニアの体験の智恵を

地域毎にデータベースに保存し、インターネットで結ぶことで、全国で共有できる「シニアの智恵のライブラリ」を構築することができる。

「二十一世紀手習塾」により、普段シニアとの交流や地域活動に参加する機会が少ない子供が社会性を持つ機会を生み出す一方、さまざまな経験やスキルを持っていながら地域に埋もれがちなシニアに新たな生きがいを生み出すことが可能となる。

(2001.11.6)

hirmurat@softbank.co.jp

Smart Senior Business Review

スマートシニア・ビジネスレビュー
2001.11.6 / Vol.2

発行責任者 村田 裕之

発行所 シンクタンク・ソフィアバンク
スマートシニア・イニシアチブ

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 3-23

TEL: 03-5259-2700 FAX: 03-5259-2920

URL : <http://www.sofia.ne.jp/ssi/>

E-Mail : sc@sofia.ne.jp